

氏名 船越 理恵
ヨミガナ フナコシ リエ
学位の種類 博士(学術)
学位記番号 博音第307号
学位授与年月日 平成30年3月26日
学位論文等題目 〈論文〉
音楽経験の意味づけと職業行動への影響
ー演奏を続けるMBAコース参加者による経験的語りを対象した分析と解釈ー

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	山下 薫子
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	毛利 嘉孝

(論文内容の要旨)

本研究は、演奏を続ける MBA コース参加者による経験的な語りを通して、音楽経験の意味づけと、音楽経験の意味づけに見る職業行動への影響を明らかにすることを目的とするものである。

本研究における「音楽経験の意味づけ」は、具体的には「音楽経験の自己における意味づけ」である。「音楽経験の自己における意味づけ」とは、音楽経験の語り手である個人が、自分自身にとっての音楽経験の意味や価値、たとえば音楽経験を通じて学びや気づきを得たこと、考え方や生き方に変化が及ぼされたことなどについて、語りを通して見出していく思考を意味する。すなわち、本研究においては、語り手当事者の意味づける行為に寄り添い、語り手を主体とする自己にとっての音楽経験の意味を重視した。

第1章では、語りを通じて、語り手における経験の意味づけを、どのように捉えていけばよいのかという問いを基軸とし、分析に際する理論的な枠組みを以下のように導いた。

経験的な語りの語り手は、インタビューの場を介することで、その自己は多元化され、二重の自己となる。二重の自己とは、語る私と語られる私の存在である。

語り手における経験の意味づけは、トランスクリプト上の語る私、すなわち〈ストーリー領域〉における〈いま・ここ〉の自己の視点から、語られる私、すなわち〈物語世界〉における〈あのとき・あそこ〉の自己に対する評価によって、現在の自己と過去の経験との間に意味が見出され、文脈としてつながりが発生している発話箇所を確認される。よって、語り手における経験の意味づけを分析するにあたっては、〈今-ここ〉の自己と〈あの時-あそこ〉の自己が経験した出来事とがつながられた発話箇所が分析対象となる。

具体的に意味づけの内容を分析していく際には、意味づけが語り手の個別性に基づく文脈として表れることを考慮する必要がある。よって意味づけが語られた文脈が失われる切片化やコード化を分析手順に組み込まない事例中心の分析方法をとる。

第2章では、第3章および第4章の研究に共通する調査方法と、インタビュー協力者である、演奏を続ける MBA コース参加者 10 人の語り手のプロフィールについて記述した。語り手のプロフィールは、インタビューによって語られた内容を通じて、音楽経験のストーリーラインを尊重し作成した。特に語り手の固有性が感じられると判断されたくだりについては、トランスクリプトから具体的なエピソードにまつわる発話を引用参照し、語り手がどのように演奏経験を積み重ねてきたのかについての解釈がずれないように工夫した。

第3章では、演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけについて、第2章でプロフィールを記述した 10 人による語りを手がかりに、考察した。結論には以下 4 点、①音楽経験の意味づけられる自己の側面は、4 通りに集約される、②音楽経験の意味づけには、演奏者としての自己規定を促す機能がある、③音楽経験の影響は、音楽に直接関わりのない人生の側面においても見出される、④夢や目標の達成に重要な内面性の形成に、音楽経験が意味づけられている、を指摘した。その上で「演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ」について「演奏者としての自己規定をすすめ、人生における様々な領域の営みに対する音楽経験の影響を見出し、人生の原動力につながる内面性が音楽経験を通じて育まれてきたことを捉える、肯定的な思考行為である」とまとめた。

第4章では、第3章での考察結果を掘り下げる展開で、演奏を続ける MBA コース参加者による音楽経験の意味づけにおいて、職業行動への影響がどう解釈されているのかについて、考察した。結論としては、音楽経験による職業行動への影響は、以下 5 つの内容①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ、②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する、③音楽経験によって成功イメージが描ける、④音楽経験によって、職業が決定づけられる、⑤音楽経験を通じて働き方が変わる、に集約されることを指摘し、それぞれにおいて、影響の見いだされ方と影響を及ぼした音楽経験に見られる共通性や特徴について明示した。

本章の結果からは、音楽経験が意味づけられた発話箇所に着目し、職業行動に関連した語りの流れを丁寧に読み込んでいくことで、音楽経験による職業行動への影響について、理論的且つ具体的な理解を深めていけることが確認された。すなわち本研究を通じては「音楽経験が仕事に役立つ」といった感覚的な意味合いではなく、具体的にどのような音楽経験が、どういった職業行動への影響へと繋がっているのかについて、導出できた。

以上を経て、本研究の結論は以下とした。

演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけに着目したことで、音楽経験が及ぼす職業行動への影響について、論理的且つ具体的な理解を導くことができた。

この結果は、語りの場づくりに留意し、音楽経験の意味づけに着目することで、音楽とは直接関係のない人生の側面や生活の領域に対する音楽経験の影響を捉えることが可能であることを提示するものである。

(総合審査結果の要旨)

申請者の論文「音楽経験の意味づけと職業行動への影響—演奏を続けるMBAコース参加者による経験的語りを対象とした分析と解釈—」は、自ら演奏活動を続けているMBAコース参加者10名を対象に詳細な聞き取り調査を行い、彼らの経験的な語りの分析と解釈を通して、音楽経験がどのように意味づけられ、さらには、そうした音楽経験が現在の職業行動にどのような影響を与えているのかを明らかにしようとしたものである。

本論は4章から構成され、第1章では、ライフストーリー論やライフヒストリー論、ナラティブ論等における方法論の先行研究を丁寧にレビューし、経験の意味づけを分析する理論的な枠組みを構築した。第2章では、調査方法を明示するとともに、インタビュー協力者である10名の語り手のプロフィールについて記述し、音楽経験のストーリーラインを作成した。第3章では、10名の事例分析を通して、音楽経験に意味づけられる自己の側面を明らかにし、さらには、音楽経験の意味づけが演奏者としての自己規定を促す機能があること、音楽経験の影響が、直接音楽に関わりのない人生の側面においても見いだされること、内面性の形成に音楽経験が意味づけられていることを実証した。そして第4章では、音楽経験の職業行動への影響が、リーダーシップ、スキルや考え方、成功イメージ、職業の決定、働き方の変容という5つの観点に総括された。

本論文の特筆すべきところは、まず、音楽とは直接関わりのない職業の人々を対象に、その音楽経験の意味づけに着目した点である。研究の着眼点そのものが独創的で、音楽の学習や活動の経験が、音楽とは直接関わりのない人生の側面、とりわけ職業行動において影響を与えていることを実証的に明らかにしたことは高く評価できる。また、丁寧に粘り強い聞き取りによって意味ある語りを引き出し、資料性の高いトランスクリプトを提示することができている。そこには、申請者自身もMBAコース参加者であるということによって生まれた調査対象者との間の相互信頼関係（ラポール）が影響していることはまちがいない。語り手当事者の意味づける行為に寄り添い、語り手にとっての音楽経験の意味が重視される本研究においては、こうした関係性の形成は不可欠と言える。さらに、関連分野の研究方法を丁寧に、網羅的にレビューし、模索しながら研究方法を追求した点にも一定の評価を与えることができる。

ただし、研究方法の妥当性にこだわり過ぎた感も否めない。そのため、最後の結論が研究方法の有効性を示すものとなっているように、本研究の眼目がどこにあるのかがやや不明瞭になってしまった点は残念である。また、語りの文脈が失われるとして批判した手法を、研究の総括において申請者自身も用いているという自己矛盾も生じている。加えて、紛らわしい言い回しや同語反復的な論述が散見され、論文全体を通じて読みづらい部分が少なくなかったことも指摘しておきたい。

こうした課題はあるものの、緻密な事例分析を通して、音楽と直接の関わりをもたない活動領域における音楽活動の意味や価値を捉え直した本論文は課程博士の学位取得に十分に値する内容であると判断し、合格とする。